令和元年度　藤島高校　学校評価書

項目	具体的取組み	成果と課題	改善策・向上策
教育課程 学習指導 研修	生徒一人ひとりの個性・人権を尊重した教育活動を推進する。	教職員の取組指数は100%であり、その内で「はい」と回答した割合が前年より5%増加した。生徒一人ひとりの能力や個性に配慮する意識が高いと言える。	教職員については、さらに研修を充実させ、意識の高揚を図っていく。また、生徒についても授業・LH・学年集会など様々な機会を通して、人権尊重の意識付けを継続的に行っていく。
	「授業評価」を踏まえて、授業内容の改善・充実に努める。	教職員の授業改善や教科指導の取組指数は100%であり、その内で「はい」と回答した割合が前年よりそれぞれ5%，6%増加した。また、生徒・保護者の学習に対する成果指数や満足度指数は前年度同様いずれも目標値を上回る高い値である。課題は、生徒の1割ほどが授業や課題に主体的に取り組めていないことである。	各教科で、ICTを活用した授業や主体的で深い学びを目指した授業の実践に取り組み、教科内で教材や教科指導法を共有できる機会を設ける。
生徒指導	生徒の容儀端正化に学校全体で取り組む。	教職員の96%が適切な容儀指導を行っており、生徒の97%が容儀の端正化に努めていると回答している。保護者も97%が本校の生活指導に満足しており、目標を十分に達成している。	時代とともに価値観が変わってきており、生徒・保護者の意見を踏まえ、頭髪・服装の規定に関して再検討するなど、より柔軟な生活指導に取り組んでいく。
	いじめの未然防止と早期発見、早期解決に学校全体で取り組む。	「いじめの未然防止に努める」「いじめの早期発見と早期解決に適切に取り組む」の両項目とも、教職員の100%が取り組んでおり、目標を十分に達成している。	いじめの未然防止・早期発見の観点から、最もトラブルが起きそうな学校祭の後は、教職員の「観察チェックシート」から生徒の「アンケート調査」に変更し、より細やかな指導ができるようにする。
進路指導	面談や進路行事などを通して、生徒の進路に関する考えを深めさせる。	教職員の100%が進路指導に十分に取組み、生徒の94%が進路について十分に考えることができ、保護者の96%が本校の進路指導に満足していることから、本校の進路指導体制は全体的に整っているといえる。学年別にみると2年生の指標が他学年よりやや低い。	進路指導部・学年会・教科会と連携しながら、多様化している進路希望に応じて、生徒一人ひとりにきめ細かい指導ができるように、資料や情報などを提供する。また、進路オリエンテーションや進路行事の振り返りを通じて進路について考える機会を作る。
保健管理	担任、教育相談担当、専門家の連携による、教育相談活動を充実させる。	取組指数、成果指数、満足度指数ともに目標値を上回る状態が継続している。教職員の間にカウンセリングマインドが定着し、生徒・保護者の多くもそう評価している。課題は、問題が生じてからの治療的な対応だけでなく、問題を生じさせない学校づくりを学校全体の課題として進めていくことである。	「先生が相談に親切に対応してくれている」とすべての生徒が感じ、成果指数が100%となるように、教職員のさらなる意識向上のための情報発信を行う。問題を生じさせない学校づくりのための提言も積極的に行う。
環境美化	学校全体でゴミの減量化と環境美化に取り組む。	「積極的に清掃に取り組んでいる」とする指標については、教職員が100%、生徒が86%と目標指数を上回り、昨年度の指数も上回っている。課題は、依然生徒の14%弱が清掃に積極的でないので、この状況からさらに向上することである。ゴミの分別に関しては、教員・生徒ともに90%を超え目標指数を上回っている。	清掃委員会・生徒会執行部と連携して、自主的活動として清掃についての生徒の意識をより高め、ゴミの減量化についての「校外から持ち込んだもののゴミは各自で持ち帰る」という原則を徹底させる。
図書	図書館行事や広報活動を充実させ、生徒の読書意欲を喚起する。	学級文庫や、図書館活用など、教職員の読書推進活動は着実に増加しており、「はい」の回答が半数を超えることとなった。その一方で、『どちらかといえばいいえ」の回答率が9ポイントも増えたため、全体としての指標も9ポイントの減少となった。教員の中でも、積極的に取り組んでいる層とそうではない層との二極分化の傾向がうかがえる。生徒では、1,2年生の3,4選択者が増えている。その結果、全体で2ポイントほどの減少となった。	教職員については今後も学年会、教科会との連携を深めながら、生徒への読書意欲を喚起するための働きかけを継続していく。今年は静粛タイムでの読書が推進されていたので、これを継続していく。特に、行事への積極的な勧誘が必要となろう。 生徒については、図書委員会の活動を中心に、本を読むことの楽しさや読書と学校活動との連携を訴える、効果的な広報活動に努める。様々な形で図書館へ足を向けてもらえる方法を考える。
情報	校内ネットワークおよび情報機器の充実と利用促進を図る。	「校内ネットワークおよび情報機器を利用して、教育活動の効率化・充実化を図っている」ということに対し、「はい」または「どちらかといえばはい」と回答した教職員が98%になっている。7割の教職員が、「はい」と回答しているので、意識は高いと言える。	新しいネットワーク等に切り替わったことやウィンドウズ10への移行で多少混乱が見られたが、より使いやすく、わかりやすい設定を心がけることで、積極的にネットワークおよび情報機器を使ってもらえるようにする。
保護者との連携	保護者と連携して教育活動を行うために、PTA活動や連絡を充実させる。	教職員の98%以上、生徒の90%が保護者への連絡を十分に行っており、相互の連携は図られていると考えられる。保護者に関しても、90%以上が教育活動や連絡を十分理解しており、学校の理解促進の取組みに満足している。昨年度同様、すべての項目が判定基準の目標値を超え高評価である。	学校の教育活動を十分理解していただくように、保護者への広報・連絡方法の改善を継続していく。保護者への広報のために、PTAのホームページの充実につとめる。全教職員に、保護者と連携して教育活動を行うことの意義を常に意識するよう働きかける。
企画研究	SSHの研究課題の達成に向けて、学校設定教科「研究」を充実させる。	研究Ⅰでは2年生での研究活動への繋がりを意識し探究スキルを身につける授業や、企業の研究開発を学ぶ企業講演会を新たに実施した。研究Ⅱでは学期ごとに活動を振り返ることで研究のサイクルを意識させた。研究Ⅲでは高度な知識を学びその上で文理混合で議論するプラタナスタイムを行った。これらの取組みによりどの学年も80%以上の満足度を得た。	「研究力」をつけるために、先輩から後輩に研究をアドバイスする場の設定や教員間の指導方法の共有、研究のサイクルに基づいた振り返りシートを利用した研究面談などサポート体制の確立を図る。さらに外部連携機関である「藤島プラットフォーム」の拡充し、研究活動の充実を図る。
	SSH研究を学校全体の取組として位置付け、研究体制を充実させる。	教員の95%がSSHの取組は学校全体の取組みとなっていると回答している。担当者打合せ会でも授業内容の熱心な検討が行われるなど充実してきた。	1～3学年で「研究」が実施され、より多くの教員がSSHの教育活動に携わることになった。今後は課題研究発表会、セミナーなどにおいても、教員間の連携をより細かに図ることで、より充実した取組みに繋げる。また授業改善の取組みなども積極的に発信していく。